

日本原子力研究開発機構機関リポジトリ
Japan Atomic Energy Agency Institutional Repository

Title	問題提起：灰色文献定義の再考
Author(s)	池田 貴儀
Citation	情報の科学と技術, 62(2), pp.50 -54
Text Version	Publisher
URL	http://jolissrch-inter.tokai-sc.jaea.go.jp/search/servlet/search?5033996
NAID	http://ci.nii.ac.jp/naid/110009328048
Note	情報の科学と技術誌公式サイト： http://www.infosta.or.jp/journal-top/

問題提起：灰色文献定義の再考

池田 貴儀*

灰色文献は、一般の商業出版ルートでは入手が困難な文献である。近年は、機関リポジトリの普及等により、灰色文献も Web 上に全文情報が公開され、容易にアクセスが可能になりつつある。しかし、灰色文献のアクセシビリティは解決されていない。本稿では、灰色文献国際会議 (International Conference on Grey literature) における議論の中で提案された灰色文献の定義を紹介し、灰色文献に関する論点整理と問題提起を試みた。灰色文献のアクセシビリティは今日に至っても多くの課題が存在し、Web 上の情報源は永続的なアクセスが保証されていないという新たな課題も存在する。灰色文献のアクセシビリティに関する課題の解決には、図書館員の持つ専門知識と経験が活かされるべきである。

キーワード：灰色文献、非市販資料、商業出版、図書館員、テクニカル・レポート、会議録、灰色文献国際会議

1. はじめに

灰色文献とは、一言で言ってしまうと、一般の商業出版ルートでは入手が困難な文献である。流通経路が不明確で、限定された部数しか作成されない、配布先が限定されているなどの特徴を有している¹⁾。近年は、インターネットの普及や資料の電子化に伴い、全文情報へ容易にアクセスできる環境が整いつつあることから、灰色文献とアクセシビリティの問題は解決されたとも言われている。

しかし一方で、インターネット上でも探すことが困難な文献、インターネット上のみには存在しない情報のアーカイブが十分ではない問題等の新たな課題も生まれている。2010年に行われた灰色文献に関する調査でも、図書館情報学の研究者と図書館員の多くが、灰色文献のアクセシビリティは今後も継続する課題と捉えている²⁾。

そこで本稿では、灰色文献国際会議 (International Conference on Grey literature) の灰色文献の定義を中心に、定義の再考を行い、灰色文献に関する議論の論点整理と問題提起を試みる。

2. 灰色文献の定義

灰色文献という言葉が最初に使われたのは1978年12月にイギリスのヨークで開催された灰色文献に関するセミナーが最初であるとされている³⁾。灰色文献という言葉が使われる以前は、アクセシビリティの困難性の側面から、非市販資料 (Non-conventional Literature)、入手困難な資料 (Hard-to-get Literature)、一過性資料 (ephemera)⁴⁾などと呼ばれていた。このように、灰色文献以外の呼称もある上、多種多様な資料形態が灰色文献に該当し、定義

する者によってニュアンスが異なる場合もあることから、灰色文献に関する概念や定義は数多く存在している。これは、灰色文献を定義することが困難な表れでもある⁵⁾。

本章では、灰色文献国際会議の中で提案された灰色文献の定義について取り上げて行く。その前に、灰色文献国際会議について簡単に紹介する。灰色文献国際会議とは、灰色文献ネットワークサービス (Grey Literature Network Service : GreyNet) が主催する国際会議で、2012年で14回目を迎える。本会議の開催趣旨は、灰色文献に関するすべての情報の収集と整理およびこの分野における調査と研究の振興にある⁶⁾。本会議では、図書館情報学の研究者や図書館員が集まり、参加者による様々な事例報告や灰色文献の定義の検討を通じ、諸問題の提起やその解決方法について議論がなされている。また、GreyNetは、それに必要な国際協力の推進を図る取り組み等も行っている。

2.1 ニューヨーク・ルクセンブルク定義

現在、最も一般的とされる灰色文献の定義が、灰色文献国際会議の場で議論が行われたニューヨーク・ルクセンブルク定義である⁷⁾。ニューヨーク・ルクセンブルク定義において灰色文献は「紙や電子フォーマットで、政府、大学、ビジネス、産業のあらゆるレベルにおいて生み出されるもので、商業出版社によってコントロールされない」「すなわち、主たる活動が出版を本業としない組織によってコントロールされている」と定義されている⁸⁾。

前者は、1997年にルクセンブルクで開催された第3回灰色文献国際会議 (Third International Conference on Grey literature : GL3) の場で承認された定義で、会議を行った地名からルクセンブルク定義と呼ばれている。後者は、2004年にニューヨークで開催された第6回灰色文献国際会議 (Sixth International Conference on Grey literature : GL6) において定義が拡張された部分で、ルクセンブルク定義の最後に追加された。ニューヨーク・ルクセンブルク定義は、紙や電子フォーマットで作られた出版

*いけだ きよし 独立行政法人日本原子力研究開発機構
研究技術情報部 原子力情報システム管理課
〒319-1195 茨城県那珂郡東海村白方白根 2-4
Tel. 029-282-6598 (原稿受領 2011.12.2)

物、商業出版社によるコントロールという灰色文献を作成し刊行する側の側面が強調されるとともに、あらゆるレベルで生み出されるものという言葉が示すように、資料へのアクセスや資料の識別同定が困難であるという注意喚起の意味も込められていた⁹⁾。また、定義では「生み出されるもの」という表現であるが、最近では、ニューヨーク・ルクセンブルク定義を引用する際に「生み出される情報」という表現が用いられる場合もある⁹⁾。

ニューヨーク・ルクセンブルク定義に照らし合わせると、現在、灰色文献の対象となりうるものは100種類を越えている¹⁰⁾。これは、商業出版ルートに乗らないあらゆるものやあらゆる情報が灰色文献に該当するという解釈が可能なこと、インターネットの普及や資料や情報の電子化といった技術の進歩に十分対応できていないこと、が要因と考えられる。

2.2 プラハ定義

こうした中、プラハで開催された第12回灰色文献国際会議（Twelfth International Conference on Grey literature : GL12）において、新たな定義となるプラハ定義が提案された。プラハ定義では、灰色文献は「知的財産権により保護された紙や電子のフォーマットで、政府、大学、ビジネス、産業のあらゆるレベルにおいて生み出される多様なドキュメント形態で、図書館所蔵や機関リポジトリで収集、保存される十分な品質を持つものを表す。しかし、商業出版社によってコントロールされているのではない。主たる活動が出版を本業としない組織によってコントロールされている」と定義されている⁹⁾。この定義を提案したシュプフェル（Schöpfel）は、灰色文献の形態の側面、知的財産権などの法的性質の側面、灰色文献の品質の側面、図書館と図書館員の役割の4点を、ニューヨーク・ルクセンブルク定義に追加した視点として強調した⁹⁾。

灰色文献の品質に関しては、過去にも言及され、査読がない等、品質が十分に保証されていないなどの否定的な意味合いで灰色文献の特徴として述べられることが多かった。プラハ定義はまだ承認されていないが、灰色文献の質的な視点の重要性が改めて見直され、その視点が定義に盛り込まれたことは、一定の品質を有することが灰色文献の条件であるということが明確になったと捉えることができる。しかし、品質の問題は、書誌情報の不備といった体裁的な部分の判断はできても、査読の有無や内容に関する部分についてまで図書館員が踏み込むことは困難であり、今後ますますの議論が必要になる。

他方で、従来から図書館員は、灰色文献の収集、整理、提供に大きく貢献し、灰色文献と利用者を結び付けることを目的にたゆまざる努力を続けてきた。プラハ定義で灰色文献に対する図書館の役割や位置づけも盛り込まれた点は、灰色文献と図書館および図書館員の関係を考える上でも非常に興味深いものがある。

しかし、これら複数の視点がプラハ定義で追加されているとはいえ、ニューヨーク・ルクセンブルク定義を踏襲す

る形で位置づけられているアクセシビリティの問題は、灰色文献にとって最も重要な側面である。

3. 灰色文献とアクセシビリティ

灰色文献は、商業出版ルートに乗らないなどの理由で入手困難な資料を探し出し、その資料に如何にアクセスするかという点に重きが置かれてきた。しかし今日では、インターネットの普及により、Web上に電子化された資料の全文情報が公開されることが増え、従来では入手が困難であった紙媒体での資料についても容易にアクセスが可能となった。

例えば、代表的な灰色文献とされるテクニカル・レポートは、従来は紙媒体で作成され、限定された配布先へ資料交換の対象として送付されていた。近年は、研究開発機関のWebサイトから全文のPDFが公開される事例も増えている。同じように政府刊行物の報告書や審議資料も官公庁のWebサイトで発信されるようになった。このように、灰色文献がWeb上で公開される機会が増え、全文情報へアクセスできる可能性が増加したことは事実である。

しかし、全文情報がWeb上に容易に公開されるようになったからといって、灰色文献のアクセシビリティの問題が解消されたわけではない。なぜなら、多くの場合、電子化された全文情報が現在Web上で閲覧やダウンロードができる状態にあるというだけで、永続的なアクセスが保証されているわけではない。なぜなら、サーバの変更に伴うURLのデッドリンク問題、サイトの閉鎖など、発信側の都合により公開が取りやめになる可能性もある。また、Web上に存在する情報源のアーカイブの問題や電子媒体の保存の問題など、課題も多く存在する。さらに、商業出版ルートに乗った刊行物のように定期的な新刊情報が発信される機会も少なく、収集する側や利用する側がその情報源の存在を知らなければアクセスできないことから、灰色文献のアクセシビリティの問題が完全に解決したとは言いがたい。そして、刊行が容易になったことは、刊行物としての体裁を十分に整えなくても刊行できるため、文献形態が自由に選択でき統一性がとれない問題、書誌情報の欠落を招く危険性、それに伴い組織化が困難になる可能性もはらんでいる。

このように、灰色文献がWeb上に存在しているにもかかわらず「入手が困難」という、灰色文献の特性に関する本質的な課題、永続的なアクセスが保証されていないという新たな課題も視野にいと、灰色文献のアクセシビリティの問題は今後も継続する課題である。

4. 灰色文献の形態とアクセシビリティ

プラハ定義では「あらゆるレベルにおいて生み出される多様なドキュメント形態」が灰色文献と謳われている。定義という大きな括りであるため、形態別のアクセシビリティまで踏み込んで言及されていない。しかし、テクニカル・レポート、紀要、博士論文などの灰色文献の形態ごとにもアクセシビリティには差があると考えられる。

元来、灰色文献という呼称は、原文献へのアクセシビリティを色で表わしたもので、非公開資料や秘密文書といった黒色（ブラック）、商業出版ルートに乗り入手が容易な白色（ホワイト）、その中間に位置する灰色（グレー）と呼ばれている²¹¹⁾。灰色文献の公開の度合いや入手の容易さから、薄い灰色（light grey）、灰色（medium grey）、濃い灰色（dark grey）と同じ灰色でもさらに区分けされることもある¹²⁾。

15年前に示された区分けでは、薄い灰色には、経済レポート、市場レポート、規格、法律文書、会議録が、灰色には、テクニカル・レポート、学位論文が、濃い灰色には、研究成果報告書や調査結果報告書のうち内部向けに作成したものが該当するとされた¹²⁾。現在は、テクニカル・レポートも Web 上で全文情報が公開されるなど、昔は灰色であったものが、限りなく薄い灰色に近くなりつつあるように、時代とともに灰色文献のアクセシビリティは変化している。

また、この色による区分けは、テクニカル・レポートや学位論文といった灰色文献の種類に限らず、同じ灰色文献のカテゴリであっても差が生じると考えられる。そこで、会議資料を例に灰色文献の色分けを考えてみたい（図 1）。

<p>薄い灰色 (Light Grey)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会議日程 (Web上で公開) ・プログラム (Web上で公開) ・予稿集 (Web上で公開) ・会議録 (Web上で公開)
<p>灰色 (Medium Grey)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予稿集 (学協会、会議事務局刊行) ・会議録 (学協会、会議事務局刊行)
<p>濃い灰色 (Dark Grey)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予稿集 (参加者配付のみ) ・会議録 (参加者配付のみ)

図 1 色による区分けから見た会議資料のアクセシビリティ

会議資料の会議日程、プログラム、予稿集、会議録は Web 上で公開され、薄い灰色に含まれるケースが増えてきている。このように、同じ予稿集や会議録であっても、電子化されて Web 上に公開されているものは薄い灰色に近く、参加者に限定配付されたものは濃い灰色に近い、というように違いが生じる。また、会議録によっては、図書として商業出版社から販売されるものや、学術雑誌の Special Issue や Supplement として刊行される場合もあり、商業出版ルートで入手できるものも存在する¹³⁾。つまり、同じ灰色文献であっても、このようにアクセシビリティに差が存在する。本稿では、会議資料を例に示したが、個々の灰色文献についてもそれぞれアクセシビリティに差があり、それぞれ特有の問題を抱えていることが推察できる。

5. 灰色文献と白色文献

灰色文献のアクセシビリティについては、改善されている面もあるが、依然として課題があることを述べてきた。また、商業出版ルートに乗らないことが、灰色文献の特質であり、アクセシビリティにも影響を与えている点がブラハ定義に限らず、灰色文献の様々な定義でも強調されてきた。しかし、商業出版ルートに乗る図書や雑誌などの白色文献についてもアクセシビリティの問題と無縁ではない。

現実的な問題として、出版物には寿命がある。日本国内で出版された図書や雑誌が、数年後には絶版となっており、入手できない事例は多々存在する¹⁴⁾。『出版年鑑』によれば、2010年に出版された書籍は約 8 万件であり、灰色文献という言葉が使われ始めた頃の 1980 年（2 万 8 千件）と比べると実に 3 倍近い数に上っている¹⁵⁾¹⁶⁾。しかし、毎年数万件以上刊行されている資料のうち、現在も入手可能な資料はどの程度あるのだろうか。出版年を遡るほど、書店や出版社のデータベースで検索しても絶版、在庫無しと表示される確率が高くなる。すなわち、商業出版であるにもかかわらず、刊行から時間を経た場合は入手が困難な資料が存在する¹⁷⁾。

昨今では、出版社の合併、倒産も珍しくない。出版社が存在しなくなった場合、従来から刊行されてきた資料が商業出版ルートに乗らなくなる可能性もある。このように、商業出版ルートを通じて容易に入手できると言われている白色文献でさえ、時間の経過とともに資料の入手が困難となる側面を持ち合わせ、時には灰色文献になりうる可能性も秘めている。

補足であるが、この事例はあくまでも購入という側面から紹介している。仮に絶版となった資料でも、図書館間の協力や連携によって入手可能である場合は多い。そういう意味でも、灰色文献だけでなく、入手困難とされる資料を利用者に提供する上で、図書館や図書館員が担う役割は大きいと考えられる。

6. 灰色文献と図書館員

ブラハ定義では、図書館と図書館員の役割が強調された。灰色文献の収集、整理、提供には図書館員が大きく関わり、灰色文献と利用者を結び付ける上で図書館員が担うべき役割が大きいことがうかがえる。

先にも述べたように、電子化された全文情報が現在 Web 上で閲覧やダウンロードができる状態にあることは、アクセスが可能であっても、灰色文献のアクセシビリティの問題が解決したわけではない。これは、Google 等の検索エンジンで容易に検索結果が得られてしまう現在において、そこから本当に必要な情報を見つけたのは困難を伴うという別の問題も絡んでくる。特に、Google 等の検索エンジンだけを頼りにしてしまうと、検索からもれた情報や存在しないものと捉えられてしまう危険性もあり、Web 上に存在しているはずの灰色文献が、情報の海に埋もれたまま見つからずに終わるという状況も起こりうる。

それ故、灰色文献を含む様々な資料、各種データベース等の情報源へのナビゲートの役割を果たしている国立国会図書館の「リサーチ・ナビ」¹⁸⁾、紀要や学位論文を含む研究成果を積極的に発信している機関リポジトリ、欧州における多分野の灰色文献を収録したリポジトリ **OpenGrey**¹⁹⁾、政府刊行物を収集し提供する寄託図書館など、図書館員による灰色文献と利用者を結び取り組みが重要となる。

灰色文献は、研究者や技術者など、実際に文献を利用するエンド・ユーザが一番関わりを持つと思われるのだが、ナタラージャン (Natarajan) も指摘するように「灰色文献を探しアクセスできるように努力を続けているのは図書館員」である²⁰⁾。そういう意味でも、本特集のように灰色文献特集が生まれ、灰色文献に関する文献が国内外で数多く刊行され、また、灰色文献国際会議が灰色文献をテーマに継続的に開催され、図書館情報学の研究者や図書館員によって多くの発表がなされていることは、図書館や図書館員と灰色文献の問題が今もなお関わりを持ち続けていると言えるだろう²¹⁾。

7. おわりに

灰色文献の定義を再考しながら、紙・電子が混在する中で数多く生み出され続けている灰色文献のアクセシビリティが抱える課題、同じ灰色文献であってもアクセシビリティに差が生じる点、さらに、灰色文献の収集、整理、提供においては、今後も図書館員の役割が重要であるという点について述べてきた。インターネットの普及は、灰色文献の問題を減少させたのではなく、より複雑な状況を創り出したと言える。これは、灰色文献の定義がまだ十分でないことも要因の一つと考えられる。

灰色文献は「商業出版ルートに乗らない」ため「入手が困難」文献であることが前提となる。それに加え、アクセシビリティの観点から、先の絶版の事例のように、存在しているにも関わらず種々の理由で全文情報に辿りつくことができない「結果的に入手が困難」な文献という側面もある。すなわち、灰色文献には、流通の過程と、刊行・公開後の状況という、二つの解釈が存在する。このように、灰色文献問題は終わりを迎えたわけではなく、図書館員が専門性を発揮しながら今後も取り組んでいくべき課題である。

注・参考文献

(url 参照日は全て 2011 年 11 月 30 日である)

- 1) 日本科学技術情報センター. “グレイリテラチャー”. 科学技術情報ハンドブック. 日本科学技術情報センター, 1995, p.157.
- 2) 図書館用語辞典編集委員会編. 図書館用語大辞典. 柏書房, 2004, p.456-457.
- 3) Schöpfel, Joschim. Toward a Prague definition of grey literature. Proceedings of the Twelfth International

Conference on Grey Literature. Prague, 2010-12-6/7, 2011, p11-26.

- 4) Alberani, Vilma. Castro, Paola De. Grey literature from the York Seminar(UK) of 1978 to the year. Inspel, 2001, vol.35, p.236-247.
- 5) Gokhale, Pratibha A. Grey literature varieties: definitional problems. Proceedings of the Third International Conference on Grey Literature. Luxembourg, 1997-11-13/14, 1998, p. 259-273. <http://www.opengrey.eu/>
- 6) Young, Heartsill; 丸山昭二郎 [ほか] 監訳. ALA 図書館情報学辞典. 丸善, 1988, p.8. 一過性資料は「一時的に関心を集め価値をもつ資料で、主としてパンフレットまたは切抜き資料からなり、ふつうは限定された期間パーチャル・ファイルに保管される。過去のものとなった上記の資料で、文学的・歴史的重要性を獲得するに至ったもの」と定義されている。
- 7) 坂本現意味, 小原満徳. 第一回灰色文献国際会議の報告. 情報管理. 1994, vol.37, no.4, p.311-318.
- 8) Schöpfel, Joachim; Farace, Dominic J. “Grey literature”. Encyclopedia of Library and Information Sciences. Third edition, Taylor & Francis, 2009, p. 2029-2039.
- 9) GreyNet International, Grey Literature Network Service. <http://greynet.org/>
- 10) Document Types in Grey Literature. <http://www.greynet.org/greysourceindex/documenttypes.html>
- 11) 富田美樹子. 行政情報アクセスの課題: 出版物と文書をつなぐ視点で. レファレンス, 2006, p.57
- 12) Di Cesare, Rosa. ; Sala, Cesare. The use of grey literature in the agricultural economics field: a quantitative analysis. Proceedings of the Second International Conference on Grey Literature. Washington. D.C., USA, 1995-11-2, 1996, p. 157-168.
- 13) 池田貴儀. 科学技術分野における会議録の収集と提供: 日本原子力研究所図書館の場合. 情報の科学と技術. vol.55, no.5, 2005, p.219-223.
- 14) 恒川隆男. 図書館: 絶版の多い時代の研究の叢. 図書館の譜 (明治大学図書館紀要). 2001, no.5, p.38-45.
- 15) 出版ニュース社出版年鑑編集部. 出版年鑑 1980. 出版ニュース社, 1981.
- 16) 出版ニュース社出版年鑑編集部. 出版年鑑 2010. 出版ニュース社, 2011.
- 17) 古書店等で入手できる場合もあるが、在庫状況にも左右されることから誰もが容易に入手できる方法とは言い難い。また、絶版本を冊子や電子書籍として復刊する取り組みも行われているが、膨大な絶版本のすべてに対応することは困難であり、著作権や出版契約の処理の問題やサービス主体の運営維持など課題も多い。青空文庫. <http://www.aozora.gr.jp/> 絶版堂. 絶版書籍の電子書籍化支援サービス. <http://zeppan.digitalharvest.biz/> 「tanomi.com -たのみこむ」サービス終了のお知らせ. <http://www.tanomi.com/>
- 18) リサーチ・ナビ. <http://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/>
- 19) OpenGrey. <http://www.opengrey.eu/>
- 20) M. Natarajan. Grey literature: problems and prospects for collection development in e-environment. The Grey Journal, 2006, vol.2, no.2, p.100-105.
- 21) 池田貴儀. 灰色文献をめぐる動向灰色文献国際会議の議論を中心に. 情報管理, 2010, vol.53, no.8, p.428-440.

Special feature: Grey literature. Overview : rethinking the grey literature's definition. Kiyoshi IKEDA (INIS and Nuclear Information Management Section, Intellectual Resources Department, Japan Atomic Energy Agency, 2-4 Shirakata Shirane, Tokai-mura, Naka-gun, Ibaraki 319-1195 JAPAN)

Abstract: Grey literature said to do difficult to obtain through commercial publishers. Recently, according to the spread of institutional repositories, grey literature is published on the Web and its full text is open to the public, then it has become easily accessible. Yet, the accessibility of grey literature has not been fully resolved. In this paper, the author introduces the definition of grey literature based on the discussion of the International Conference on Grey Literature (International Conference on Grey literature) and tries to reorganize and discuss on issues concerning the problems of grey literature accessibility. The author indicates that there are still many challenges in this field, also indicates that stable access to the sources on the Web is not always guaranteed. It is concluded that expertises and experiences of a librarian should be leveraged to get solutions regarding the accessibility of grey literature.

Keywords: grey literature / non-conventional literature / commercial publishing / librarian / technical report / proceedings / International Conference on Grey Literature